

---

# ポートフォリオ学習の試み

## —実践報告(1)—

中 川 武

---

### 1. はじめに

近年、大学における英語教育改革の必要性が叫ばれるようになり、創意工夫を凝らした様々な実践がなされ、また報告されている。旧来の「英文和訳」を中心としたいわゆる「訳読式」の授業では、最早学習者の関心を集めることが不可能となりつつある。外国語学部、英米語学科といった、英語に特化した専門色の強い学部であればまだしも、それ以外の学部・学科においては、志願者倍率の減少に端を発する「私学全入時代」の到来が喧伝される昨今、学習者の英語学習への動機づけはますます困難になっている<sup>1)</sup>。この種の現象は本学においても例外ではなく、AO入試・推薦入試といった、実質「学力試験による選抜」を経ずして大学に入学してくる学生が増加する一方で、入学後授業についていけない学生、教員の求める一定の水準をクリアできない学生もまた増えているのが現状である。英語学習といってもさまざまな方法があり、多様化する学習者群に対して最も効果的な学習環境を提供することは非常に困難な課題であるが、いずれの学習方法においても、教員の側にこれまでにない強い改革意識を迫られていることは必至である。

つくば国際大学（以下本学）においても、授業内容の全面的な見直しとさらなる改善を目指して、担当教員間の適宜な情報交換および討論が繰り返されてきた。特に共通シラバスに則って開講されている「現代英語Ⅰ・Ⅱ（必修科目）」では、使用テキスト、進度、評価方法や達成目標に関して、綿密な話し合いが持たれてきた。とりわけ平成14年度からは、学習者が自らの学習過程や内容を記録する「ポートフォリオ」をその柱として取り入れ、学習効果を高めようと試みている。本論文ではこれまでの試みと、著者が担当した平成16年度「現代英語Ⅰ」における、ノート作成と中心としたポートフォリオ学習後に実施したアンケート結果について報告する。

### 2. ここまでの経過

「現代英語Ⅰ・Ⅱ」を履修するのは新入学生であるため、入学直後（4月）の新入学生対象オリエンテーションの一環として英語プレイスメントテストが実施され、その結果によって学生の習熟度に応じたクラスにプレイスメントされるのが通例である。著者が本学での勤務を開始して以降（平成12・13年度は助手としての勤務であり、実際にクラス担当を開始したのは平成14年度以降であ

る), プレイスメントテストの採択については試行錯誤の連続であった。使用したテストは以下のものである。

○平成12・13年度 JACET Basic Listening Comprehension Test Form A: 大学英語教育学会 (日本の大学教員学会としては最大規模の会員組織) が作成したテスト

○平成14年度 G-TELP General Tests of English Language Proficiency: SDSU (San Diego State University 米国カリフォルニア州の州立大学) により開発されたテスト

○平成15・16年度 英語能力判定テスト(c): 財団法人日本英語検定協会 (英検を運営) が開発したテスト

一例として佐藤・中川・山名 (2003) では平成14年度のプレイスメントに関する報告と考察があるが, 学習効果を高められるプレイスメントを行うのは非常に困難な作業であるといえよう。テスト自体の是非のみならず, 本学学生のレベルに応じたテストであるかも重要なファクターとなるため, 両要素が有機的に機能して初めて適切なプレイスメントになり得る。例えば平成14年度の場合, アメリカで開発された G-TELP がその主たる対象をアメリカ国内の非英語話者としており, 必然的に「聴解力に比べて文法力の弱い」学習者を想定しているために, 本学の学生にとって文法問題はまだしも聴解問題は難し過ぎ, (本学学生を対象とした場合においては) 弁別性を持ったテストとは言い難い, といった点が指摘された (2003: 19)。

ポートフォリオ学習に関しても, 平成14年度は手探りの状態であったが, 15年度から共通のワークシートを導入し, 学習形態の見直しが図られた。詳細については佐藤・山名・中川 (2004) に譲るが, 特に平成15年度においては, PC とポートフォリオを組み合わせた指導法が, より自律的な学習を促進することがその成果として示された。

### 3. 実践例

平成16年度も15年度と同様の教材, 学習の手順を採ることとした。以下その概要のみを示す。

○対象: 英語能力判定テスト(c)の結果により「現代英語 I (前期) (2004年4月～7月)」上位群にプレイスメントされた26名

○教材: The Lost Secret (CD-ROM 教材)

学習の進め方 (教材の取り扱いを含む) については佐藤・山名・中川 (2004) と同一であり, 同論文に詳細な記述があるのでここでは割愛する。授業は入学後の4月から前期学期の終了する7月末までの4ヶ月間実施された。90分×週2回 (計30回) 完結である。

### 4. アンケート結果から

学習終了後 (2004年7月) に著者作成のアンケートを実施した。項目は以下の通りである。

- (1) 授業全体に関して
- (2) 自身の授業への取り組みに関して

- (3) 授業でPCやCD-ROMを用いることに関して
- (4) 授業でノート作成（＝ポートフォリオ学習）を行うことに関して
- (5) 授業の進度に関して
- (6) 先生の説明に関して
- (7) 感想、要望、質問、意見

自由記述式である(7)を除いて全て「満足(4) 概ね満足(3) やや不満足(2) 不満足(1)」の選択式で回答させた。結果を以下に示す(表1)。

26名という小規模なアンケートであるが、全項目にわたって「不満足(4段階評価の1)」という回答が見られなかったことは、学習者の授業全体に対する満足度が全般的に高かったことがうかがえる。以下、順に概観する。

(1) 授業全体に関して

ほぼ全員(25名, 96%)が満足あるいは概ね満足と回答している。残り1名は今回使用の教材を「易し過ぎた」と評価した学生であるが、この学生については後述する(次章の通し番号16の学生)。

(2) 自身の授業への取り組みに関して

6名(23%)の学生は「不満足」寄りの評価となった。「復習が不足してチェックシート(小テスト)で納得のいく結果をあげられなかった」「ノートを自分の思うように作成できなかった」「授業の中で時間配分がうまくいかず、こなすべき内容を省かざるを得なかった」等、個々の反省が反映されものと思われる。

(3) 授業でPCやCD-ROMを用いることに関して

23名(89%)が満足あるいは概ね満足と回答したことから、PCを用いた学習が好評であったと思われる。

(4) 授業でノート作成（＝ポートフォリオ学習）を行うことに関して

ノートを作成することが負担に感じられるかと危惧したものの、結果は25名(96%)が満足寄りと回答している。成果が形となるノート作成に手応えを感じたのであろうか。やや不満足と回答(1名)したのは、クラス内唯一の留学生(次章19)であった。ノート作成の使用言語が英語・日本語にならざるを得ず、母国語が使えない留学生にはやや問題が残る結果となった。この留学生の感想については次章にて触れる。

(5) 授業の進度に関して

表1 アンケート結果(数字は%・カッコ内は実数)

項目	4(満足)	3(概ね満足)	2(やや不満足)	1(不満足)	計
1	38(10)	58(15)	1(1)	0(0)	100(26)
2	19(5)	58(15)	23(6)	0(0)	100(26)
3	54(14)	35(9)	11(3)	0(0)	100(26)
4	54(14)	42(11)	4(1)	0(0)	100(26)
5	31(8)	42(11)	27(7)	0(0)	100(26)
6	62(16)	38(10)	0(0)	0(0)	100(26)

7名(27%)が「やや不満足」と回答したのは「進度が早過ぎた(=こなすべきことが多過ぎた)」という印象を抱いたことによるものであろう。詳細については次章で述べる。

#### (6) 先生の説明に関して

26名全員が満足寄りの回答を示した。自身の反省は種々あるものの、ひとまずこの学習形態が好意的に受け容れられたことは確かなようである。

### 5. 受講生の感想と問題点

本章では先述のアンケートの項目(7)(自由記述)に関して、全学生の感想を概括する。学習者の感想は大別して5つのカテゴリーに分類できる。

- \*辞書の使用に関するもの
- \*授業の進度や進め方に関するもの
- \*ノート作成に関するもの
- \*チェックシート(小テスト)に関するもの
- \*教材や学習方法の選択に関するもの

以下、順を追って学生の感想と自身のコメントを添える。なお一部文末表現を統一したが、内容については原文のままである。全感想には1~26の通し番号を付けた。

#### \*辞書の使用に関するもの

- 1.「自分で調べて分からない単語もたくさんあったので、次からは辞書を使って調べるようにしたい。」

→CD-ROMには日本語訳を表示させる機能がついているものの、逐語訳や誤訳も多く必ずしも当てにならないことを授業の中で指摘し、必ず辞書を持参するように徹底した。しかしこの学生は辞書を引くレベルにまでは到達しなかった様子である。授業の中で辞書を引くことを積極的に促した結果、大多数の学生は辞書をうまく使い、ノートの充実を試みていた様子である。

#### \*授業の進度や進め方に関するもの

- 2.「授業の進度が最初の頃は速過ぎる気がした。それ以外は分かりやすく、面白味がある授業だったと思う。最初からきちんと自分のノートを作るべきだと思ったのが反省点。」
- 3.「最初PCを使って授業を進めることに戸惑い、ノート作成などがよくできなかったが、授業の回を増やすごとによくなっていったのでよかったと思う。進度が少し速かったと思う。」
- 4.「授業の進度が少し速かった。辞書を使う時、電子辞書を持っている人は調べるのが早いですが、自分は紙の辞書だったのでどうしても時間がかかってしまった。他はよくできた。」
- 5.「PCを使っただけの授業自体が新しく、自分でノートを作成することで、ただ教えてもらうよりも理解できたと思う。ただ時間が足りなくて満足にまとめられないこともあった。もう少しやり方を工夫したかったが、見つけられなかった。授業は面白かった。時間を忘れてやっていた。とても勉強になったと思う。」
- 6.「ノート作成や授業の進め方が分かったので、これからさらに充実させたい。」

→進度についてはオンデマンドの CD-ROM 教材の強みから学生のペースに任せたが、速過ぎるというより、こなすべきことが次々にあり焦りを感じたのではと思われる。ノート作成に関しては特に一定のスタイルを強制しなかったので、学習開始の当初は戸惑いを覚えた学生も若干見られたようだ。先にも述べたが、辞書を持参した学生の中に電子辞書を持った学生が数名おり、その検索の速さと効率の良さ、簡便さには皆が興味を持ったようである。近年では電子辞書の一括購入を推奨する大学もあり、辞書離れ（重いので持参したくない、引くのが面倒といった消極的理由によるものが大半）を食い止める手段にはなりそうである。いずれにしても中学・高校において「辞書で調べる・ノートに書く」といった基本的な学習スキルを磨く時間が決定的に不足しているのは間違いないようである。

\*ノート作成に関するもの

7. 「Fill-ins や Dialog Focus をしっかりやるとノート作成の時間がなくなり、それを次に回してもやはりその回のノートの内容が不足気味になるので、CD-ROM の貸し出しや、授業とは別に時間を設けてくれるなどの援助があると非常に助かる。（貸し出しの希望を申し出ていないので、実際にどうだったかは分からないが。）授業の取り組みについては、Dialog Focus の発音を省略して時間を短縮するなど、満足にできなかったことが残念。」

8. 「自分でノート作成をするという作業はとても充実していて、英語の内容も楽しく勉強できた。」

9. 「Fill-ins をたくさん書いた時は疲れたし、もう少し減らして欲しいと思った。英語の授業でなぜパソコンを使うのかと思ったが、やってみると意外と楽しかった。先生の説明も分かりやすく、特に悪い点は思い当たらない。」

10. 「とても充実していたと思う。授業の中で少しも暇な時間がなかった。CD-ROM を使いノートを大量に書いたので中学、高校の英語よりも頭に入ってきた。」

11. 「中学、高校で学んだ単語や熟語が結構出てきたので、復習という意味ではよかったと思う。Fill-ins の穴埋めでは、単語としてではなく熟語で記入できれば覚えるのも早くなると思う。」

12. 「大事な単語や熟語を先生が黒板に書くのだが、それは授業の最後の方に書いて欲しい。せっかく自分で探した単語や熟語をノートに書いても先生は「黒板を書き写しただけだ」と誤解する可能性があるから。予め黒板に書かれたものと自分で見つけたものが一致することがよくある。」

→時間配分に苦慮したというのは尤もな感想である。ノート作成を充実させればさせる程、時間配分が足りなくなるというジレンマが感じられる。著者自身の反省としては、授業が散漫かつ間延びした印象を極力残さないために 1 時限の中にあれこれと詰め込み過ぎた感があるが、オンデマンド教材の最大のメリットを利用し、学習者が自己のペースに合わせて力点を変えるべく支援すればよいのであって、この点をうまく学習者に伝えられなかったのが今後への課題である。しかし 7 のような、授業時間外でも学習を継続したいというその積極性は頼もしく思われる。内容の構成上、Chapter によって書き取るべき英文の量にかなり差があったので、学生の様子を見ながらうまく加減をするべく試みたが、それでもまだ対応が十分ではなかったようである。ただ殆どの学生にとって、ここまで授業の中で英語を書くという経験は初めてのものだったに違いない。タスクに集中させることは学習者に適度な負荷をかける半面プラスの効果があり、授業への参加についてもいい意

味での「食欲さ」が見られ、一層の工夫を試みたいという11や、さらには12のような感想につながる。「頑張りを認めて欲しい」という前向きな気持ちだが、この学生のように教員の授業運営に対して注文をつけるという好ましい態度に昇華されている。高く評価したい。

＊チェックシート（小テスト）に関するもの

13. 「授業外でノートの見直しをあまりしなかったせいか、チェックシートが満足のいくできにならなかった。時には進度が速過ぎて大変なことがあった。」
14. 「チェックシートの前にもう少し復習をするべきだった。CD-ROM を使っていたので、教科書に比べると英語の物語に興味がわきやすく、分からない単語を調べたいという気になった。授業の進度が速いと感じて少し焦ってしまうこともあった。」
15. 「普段からノートを忘れることが多く、チェックシート前になるとノートの見直しが足りなくて損をしたと思う。」

→時折チェックシートを実施し学習内容の確認と定着を図ったが、全てノートを見れば解答できる問題としたので、復習の有無による差が歴然と表れた（テスト時はノートの持込みを禁じた）。また欠席した学生へのフォローとして、チェックシートを復習すれば理解が不足している部分を補足できるような内容をと一応の配慮をしたものであるが、その効果は今一步であった。ただドラマ教材に興味を感じ、ストーリー展開を楽しみにしていた学生が少なくなかったのは喜ばしい。興味を持てば、「知らないことを調べて知りたい」という学習の欲求につながるものと期待したい。

＊教材や学習方法の選択に関するもの

16. 「PC で英語の授業を受けるのは初めてだったが、内容が易しめで今一步だった。もっと自分の知らない単語や熟語が出てくるものだとい。」
17. 「授業の進度が遅かった。もう少し早くてもよかった。中学、高校で既に習った単語や熟語が多かった。もっと高度な内容でもよかったと思う。PC や CD-ROM を使用しての授業はよいと思うが、90分ではやはり時間が足りないと思った。文法事項の学習が少なかったのでとても心配。」
18. 「パソコンでなくてもよかったかも知れない。」
19. 「この教材では英会話を学ぶ機会がないので実用的でない。万が一、道で外国人に会った時どうするのか。」（留学生）
20. 「英会話にかなり興味があったので、今回の CD-ROM による授業はとても楽しくできた。実際の会話を聞きながらの勉強はこれまでなかなか体験できなかったのもとても貴重だと思う。これからもこのスタイルで学習したい。」
21. 「ストーリーを見ながら英語の勉強をするというのはとてもやりやすく、楽しかった。」
22. 「今までにやったことのない授業のスタイルでとても面白かった。自分で調べるということが身についたと思う。」
23. 「今までやったことのない授業だったので、新鮮で楽しかった。」
24. 「授業で PC を使うことには賛成だが、毎回持ってくるのが大変だった。大学の PC を使うか、もしくは PC の保管場所が欲しいと思った。」

→どこか物足りないと不満を抱いたのは、いずれもプレイメントテスト結果が比較的上位の学

生の感想であるが、16の学生（この学生は先述の通りアンケートで授業全体の満足度に関してただ一人「やや不満足」と回答している）の問題点は、上記1の学生と同様に辞書を使いこなしていなかった点にある。日本語訳を見て理解した錯覚に陥っていなかったか、辞書を使い同意語、反意語をノートに増やしていく等の工夫ができたかとの面接（後日個別に実施）での問いに本人は納得していた様子である。さらに欲張って学習を深めて欲しいとの期待を込めたい。また17のコメントは非常に示唆に富むものである。文法学習に関してはその是非が常に問われ続けており、ある立場では「文法学習は英語本来の楽しさを半減させ、さらに英語嫌いを増やす根源である」と位置づけ「実用性の高い英語を学ぶべきで、その場合は文法でなく会話やリスニングから英語に親しむのが相応しい」と英会話偏重を謳う。一方で「いくら会話をしようともルール（文法）がなければ話せないし、自分で文を作ることすらできない。文法規則から外れた破格の英語では通用しない。真の習熟を望むなら、やはり文法の基礎を学ぶべき」と反論が出る。これに呼応する形で、教員の立場も文法軽視・会話偏重を支持するものと反駁するものとに二分されている印象がある。学生の反応も様々であり、この感想に見られるように「文法をやらないと、勉強したという手応えが残らずどこか不安になる」というのは、一種の生真面目さからくるものであろう。18の学生は、後日面接で問うた所「PCを用いた授業は面白かったが、教科書を使った授業に慣れていたので戸惑いがあった」とのことであった。後期学期では教科書とビデオ教材が中心になると話すとなんて思っていた様子であった。さらに19は鋭い指摘である。英語と日本語によるノート作成はこの留学生にとっては苦勞の連続であったろう。（前者と同様にこの学生にも後期学期のビデオ教材（CALL 教室を使用）ではシャドウイングを積極的に行い、授業の主幹が「聞く・話す」にシフトすることを面接で伝えた。）ただ全ての学習目的を満たす教材など存在しないのであって、授業目的に沿った教材選定がなされるのであるから、おのずと限界も出てくる。学習者の反応は多種多様であり、同じ教材を与えても20～23のようにそれを支持する学生がいる一方で、上記のように相反する感想が出てくる。難しいものである。

以上に加えて25.「厳しかったが、この位厳しい方が自分のためになると思った。」26.「英語は難しい。」というのが全26名の回答であった。

## 6. おわりに

今回のアンケート結果から、ノート作成を中心としたポートフォリオ学習が概ね好意的に受け止められたことは確かなようである。しかし教材選定や授業の進度、学習内容には依然として問題が残る。多くの学習者にとって、主体性を発揮し「学習内容を自分で精査し、決定する」というアイデアは全く未知のものであり、「学習内容やペースは先生が決めるもの。学生はそれに従うもの」との思い込みが根強くある。ポートフォリオ学習の理念やPCを用いたオンデマンド学習はこの考えを根底から覆し、積極的な自主学習を促すものである。今回寄せられた貴重な意見を糧とし、さらに授業内容の改善に努めたい。

(なかがわ・たけし 産業情報学科)

## 注

- (1)ここで英文和訳の活動そのものを非難の対象とするのは適切でない。問題の本質は「英文和訳以前に、大学入学の時点でそれまでの中学・高校での学習内容に著しい理解不足を抱える学生が急増している」点にある。英文を読むことは、高度な分析能力を必要とする知的活動である。未知の単語の意味を推測したり、あるいは辞書を引いて出てきた多義の中から、文脈の流れと照らし合わせ適切な意味を充てるといった作業は、その裏づけとなる基礎能力があって初めて可能になる。さらには「スキーマ理論」に代表される学習者の持つ背景知識や読解ストラテジーの有無により活動の成否が問われる。しかし現実には、おそらくはこれまで辞書を引いた経験すらなきに等しい学習者が「大学生」となって授業への参加を強制される（多くの大学において、英語は必修科目の一部となっているからである）。

厳しい現実ではあるが、その分工夫に富んだ授業が求められることにもなる。

## 参考文献

- 佐藤敏子・中川武・岡田あずさ 2001.「効果的な英語学習指導に向けて—学習者の文法運用力調査—」『つくば国際大学研究紀要』7, 47~66.
- 佐藤敏子・山名豊美・中川武・岡田あずさ 2002.「文法運用力とその効果的な指導法」『つくば国際大学研究紀要』8, 1~21.
- 佐藤敏子・中川武・山名豊美 2003.「習熟度別クラス編成とプレイスメントテスト」『つくば国際大学研究紀要』9, 11~22.
- 佐藤敏子・山名豊美・中川武 2004.「ポートフォリオ学習における学習者の変容—自律した学習者を目指して—」『つくば国際大学研究紀要』10, 31~48.



## Portfolio-Based Learning — The End of the Term Report (1) —

Takeshi Nakagawa

This paper reports how the learners adjust themselves to the Portfolio-based learning, by examining their performance in class and reaction to the questionnaire conducted at the end of the semester. The questionnaire consists of 7 items;

1. Overall impression,
2. Self evaluation
3. Use of CD-ROM and PC in class
4. Portfolio-based learning,
5. Pace,
6. Teacher's instruction, and
7. Comments and remarks.

The outcome confirms that the majority of the learners was satisfied with what they have done in class, and also took the Portfolio-based activities as a preferable way of language learning. The idea of using CD-ROM and PC was supported as well. Yet some still had difficulty to catch up the pace as they had too much to accomplish. Further discussions are necessary to select valid materials and make it clear on what should be emphasized on the Portfolio-based learning.

Key Word: autonomy, graded classes, placement test, portfolio